SUMMARY AND FUTURE PROSPECTS

まとめと今後の展望

まとめと今後の展望

令和６年度は、「規模災害時における学生ボランティアの育成と、ネットワーク化に関する研究」と題して、学際的な共同研究事業をすすめ、下記の３点の成果を得ることができた。

第１点としては、大規模災害時における学生ボランティアの育成を試み、大学を含め、千代田区の社会資源を巻き込んだ教育内容を展開し、その効果を解明したことである。特徴的な大学を抽出しながら振り返ってみる。

法政大学では、法政大学の 2024 年度「社会連携フィールドワーク（ベーシック）」の一環として、また、千代田区キャンパスコンソの単位互換科目として、本共同研究事業の研究者が講師とした関わり実施された。大規模自然災害発生時の大学キャンパスにおける帰宅困難者支援を目的とし、トイレ実習、非常食の試食、救命救急講習を含めた模擬的な避難生活体験が行われている。それによって、災害発生直後における避難者受け入れ施設の運営に必要な知識と実践を学生が体験し、大学や地域社会における危機管理能力の向上に寄与し得る学生ボランティア意識を醸成するとともに、ボランティア育成プログラムの開発に資する基礎的資料の収集を意図していた。帰宅困難者受け入れ施設運営ゲーム（ＫＵＧゲーム）を用いて、昨年度の研究で作成した「帰宅困難者受入準備用のアクションカード」を活用するとともに、グループワークを通じて課題の発見と解決策の模索が行われた。多様な連携機関との協力を通じて、災害時における IT ツール活用や支援方法に関する講義およびワークショップが実施されると共に、アプリを用いて参加学生の健康情報を収集し、災害時における健康管理の課題も抽出されていた。

二松学舎大学では、神田・神保町地域の災害と復興をテーマに、「文房堂」と「東明館」の２つの千代田区における災害関連の歴史的な出来事や施設について学びながら、ミニワークショップを通じて、ウィキペディアの記事執筆を作成し、歴史的意義が掘り下げられた。学生スタッフが主体的にトピックの選定や街歩きのルート策定を行った点が特徴的である。単なる記事執筆にとどまらず、Wikipedia の記事を執筆することで、防災や災害の歴史に関する学習の機会を創出することになっている。災害と復興というテーマを通じて、地域の過去を振り返るだけでなく、現在の都市環境における防災の視点を考え、社会に還元する場として大きな意義を持つことを共有することができていた。

東京家政学院大学においては、管理栄養士養成課程の必修科目「栄養教育実習」において、大学生による災害時の栄養・食支援のための教育・評価設計を行っている。動画コンテンツや紙面パンフレット教材の作成を通して、栄養教育の計画と評価の方法を具現化していた。当然、管理栄養士という国家試験の受験に必要な知識やスキルの習得を、防災をキーワードに実現した形となっている。

いずれの大学においても、各大学での学生ボランティアの育成は、各大学での授業と別に行うのではなく、防災教育の趣旨と、それぞれの教育の特徴を重ねた形で実現された。こうした展開は、それぞれの専門課程の教育内容に特色を加えることにもつながることが検証されたことにもなる。

第２点として、学生・職員・地域が連携した帰宅困難者支援施設運営ゲームの実践と評価を試みたことである。

各大学において、それぞれの強みを活かした形で、帰宅困難者支援施設運営ゲーム（ＫＵＧゲーム）を含めたワークショップが実施された。プログラムに参加した学生からは、「実際に運営側として被害者を受け入れる演習ができた。チーム全員で話し合いをし、試行錯誤するのが楽しかったし、とても考えさせられた」「ＫＵＧゲームで役割分担をするときに誰が何をやったらいいのか考えて、自分の役割をしっかりと取り組むことができた」「意見を言いやすいような空気づくりがメンバー全員でできていたことがすごく良かった」等の感想が寄せられ、災害に備えて、ＫＵＧゲームを体験することが他者を支援することや、ボランティア意識の向上に繋がることが確認できた。

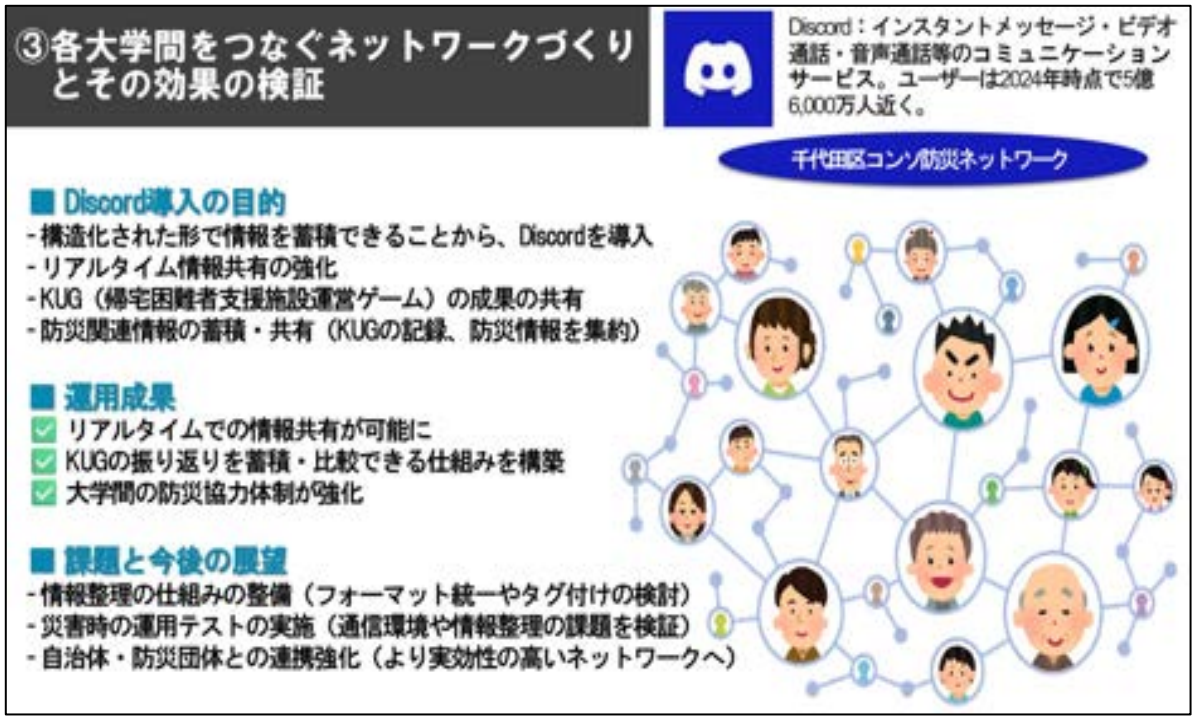
専修大学は 2023 年 11 月に千代田区キャンパスコンソに加わり、専修大学版の KUG の制作が最優先課題となった。10 年以上の活動の蓄積を有する学生ボランティアサークルＳＫＶの幹部メンバーの意見聴取を踏まえつつ、神保町の地域特性を反映させたバージョンの作成に取り組んだ。具体的には以下が盛り込まれた。①帰宅困難者カードの改編・追加（昼夜間人口の差が激しい千代田区の特性を考慮し、昼夜で異なるバージョンを作成）、②イベントカードの改編・追加（昼夜で異なるイベント発生を想定）、③帰宅困難者およびイベントカードに「必要とするボランティア人員」の数値を追加記載した。これは、帰宅困難者のサポートやイベントへの対応に割くことができるボランティアの数が有限であることの意識づけを目的としたルール「アクションコスト機能」の追加を意味した。さらに、2024 年 12 月 21 日（土）と同 22 日（日）に宿泊を伴う避難訓練が専修大学神田キャンパスで実施された。21 日の午前の部には、二名の講師による講演のほか、防災の専門家にくわえて学生ボランティアサークルの代表が参加するパネルディスカッションが行われた。午後の部では、防災備蓄倉庫および帰宅困難者一時避難場の見学に続いて、専修大学版のＫＵＧゲームが実施され、新たな展開をもたらすことになった。

今年度５つの大学（短期大学を含む）で行われたＫＵＧ実施後のアンケート結果、ＫＵＧに関する評価項目、図上演習による評価項目の結果から、これまで本事業で実施したＫＵＧと同様の評価が得られていた。一方、運営・進行上で分からない点や改善点について、多くの意見が得られた。

第３点として、昨年度まで帰宅困難者支援施設運営ゲームを実施する中で、実際の対応においては、周辺機関との連携や情報交換のためのネットワークづくりが必要であることを痛感した。そこで、今年度は、各大学間をつなぐネットワークづくりとその効果を検証することが一つの課題であった。

各大学間をつなぐネットワークの具体的なプラットフォームとして「Discord」というコミュニケーションサービスが選択された。本研究事業の大学がメンバーによって、「千代田区コンソ防災ネットワーク」という名称のサーバを立ち上げた。それによって、ＫＵＧゲームのリアルタイム共有、振り返りの集約、大学間の比較が可能になるといった効果が確認された。特に、KUG に参加していなくても他大学の進行状況を把握できる点や、各大学の知見を蓄積・共有する仕組みとして機能しつつある点は、今後の防災ネットワークの発展にとって重要な基盤をつくることとなった。一方で、情報整理の課題、実際の災害時の運用に向けた検討といった改善すべき点も明らかになった。

５大学で行われたＫＵＧ実施後のアンケート結果をみると、約７割がボランティアネットワークへの参加意思を示していた。参加してみたい理由の中に、ボランティア同士での交流や他者とのコミュニケーションに積極的な姿勢が見受けられた。また、情報共有の便利さや有効性を見出している者が多くみられた。一方、参加したくない者の中にはオンラインでの参加に対する抵抗感や、オンラインよりも対面によるコミュニケーションを重視したい考えを示す者がみられた。今回行われたＫＵＧの中でもオンラインネットワーク上での情報共有を試験的に行った大学もあり、ＫＵＧの中でオンラインネットワークの実践例を示していくことも有用であり、アナログな図上演習にＤＸを今後どのように取り入れていくかが今後の課題である。



以上、今年度、それぞれの大学で、千代田区の地域組織・団体と交流を深め、ＫＵＧゲームを防災教育の質的向上に資する教材として活用することで、学生ボランティアとしての心構えや対応力を養成することにもつながったと捉えられた。学生は多様な避難者および避難所で生じる問題を想定し、臨機応変に対応することの困難さを自分事に置き換え、防災行動に対する複眼的な目を養うことでサスティナブルな防災意識向上に資する大学教育の在り方を学生とともに探求することができたことが大きな成果である。

大学は、学生が、教職員が、そして地域資源がつながる場、結びつける場、そして巻き込む場としての機能を有している。災害といった非日常に目を向けることは、一日一日「安全とは何か」「学生生活をこれからどうするべきか」「人生はどう生きるべきか」、これからの、そして今の生き方の思想を確立することにつながる。学生は千代田区に所在する大学において、人生にとってとても重要な 4 年間を過ごすことになる。バラバラな知識はバーチャルな世界の中で多く存在する。是非、その根幹を学び合う場をつくることが千代田区キャンパスコンソの目的であり、これからの人生を豊かに過ごすために、不可欠な舞台であるはずである。本研究の成果は、千代田コンソの各大学と共有し、防災教育の改善のヒントとして各大学の防災教育を推進し、ひいては、災害に強い大学・災害に強い地域の具体的なモデルとしての千代田区の実現にも一石を投じたことであろう。

本研究におきまして、令和３年～５年の３年間、さらに、本年度も、千代田区より助成を頂き、研究活動が出来ましたことに深く感謝いたしております。これを機に、千代田区の帰宅困難者支援の施策に学び、学生のボランティアの育成、そのネットワーク化のために果たす大学の役割を、教職員が学生と共に語り合い、学びあう機会を持つことができました。防災・減災意識を高めることは、学生・教職員のお互いの命を守ることはもとより、家族、地域と共に、過去を生きてきたこと、また、これからを生きていくことへの期待と挑戦となっていくことでしょう。同時に、今年度から、千代田区キャンパスコンソの活動に専修大学が加わり、本共同研究事業を通して、連携を強化することができたことも財産となりました。

本研究を進めるにあたり、千代田区 地域振興部 コミュニティ総務課、政策経営部災害対策・危機管理課の皆様には、研究事業の遂行を多面的にご支援いただきました。心より感謝申し上げる次第です。また、私たちの研究活動を支援し続けていただきました関係者の皆様のご理解とご協力に、この場をお借りして深甚の謝意を表したいと存じます。

今後も千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（千代田区キャンパスコンソ）の活動にご支援・ご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

執 筆 者（ 50 音順 ）

伊藤　マモル　法政大学 法学部 教授
（第 2 章 第 2 節）
小林　貴徳　専修大学 国際コミュニケーション学部　准教授
（第 5 章 第 1 節・第 2 節）
酒井 治子　東京家政学院大学 人間栄養学部 教授
（第 1 章、第 3 章 第 4 節、第 4 章 第 2 節、まとめと今後の展望）
富永 暁子　大妻女子大学 短期大学部 家政科 准教授
（第 4 章 第 1 節）
谷島 貫太　二松学舎大学 文学部 准教授
（第 2 章 第 1 節・第 3 節、第 3 章 第 1 節）
深津 謙一郎　共立女子大学 文芸学部 教授
（第 3 章 第 2 節）
堀 洋元　大妻女子大学 人間関係学部 准教授
（第 3 章 第 3 節・第 5 節）
渡辺　明日香　共立女子短期大学 生活科学科 教授
（第 3 章 第 2 節）
（所属は 2025 年 3 月現在）

MEMO

MEMO

令和６年度　「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度　共同事業　報告

大規模災害時における学生ボランティアの育成と、

ネットワーク化に関する研究

令和 7 年（2025）3 月

「千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（千代田区キャンパスコンソ）」

幹事校　東京家政学院大学　人間栄養学部　酒井治子

〒102-8341　東京都千代田区三番町 22 番地

Tel:03-3262-2251

千代田区キャンパスコンソ

Chiyoda Campus Consortium